

## 技術士取得を振り返って



取得した資格：技術士（水産部門、総合技術監理部門）  
資格取得年度：令和元年度、令和4年度

なかにし こう  
中西 豪\*

### 受験の動機・経緯

私が技術士2次試験を初めて受験したのは平成28年でした。それまで職場の先輩方や大学の同級生たちが技術士を取得していくのを見て、「いずれは自分が」と思っていました。しかし、「そろそろかな」と思って受験を決めました。

### 1・2回目の受験を振り返って

当時は、水産庁にて漁場整備に関する業務に従事していました。検討会も何回か開催し、この分野に関する知見はある程度有していると思っており、過去問を見て、「この内容なら大丈夫かな」と、ある意味慢心して特段試験準備は行わず、試験に臨みました。当時実際に出題された内容も漁場整備に関する問でしたので、十分回答できたと思っていました。しかし結果は不合格でした。正直言って、何故不合格なのか分かりませんでした。

翌29年度も懲りずにあまり対策を立てないまま受験し、あえなく玉砕しました。技術士を取得した方に聞くと、「何回か受けているとコツが見えてくる。」「書きすぎないことがポイント」など、半ば腑に落ちないコメントをいただき、「まあ、そういうものかな。」とあまり反省もしていませんでした。

### 論文添削での気づき

30年度は一旦お休みして、令和元年度に再々受験しました。職場での勉強会で論文を添削していた

だけというので、過去問を解いて、添削していただきました。そうしたら、それはそれは辛辣なコメントが返ってきました。論理が矛盾している、主観的要素が強い、論述が局所的過ぎて「分かっています」感がない…。あまりにも辛辣でメールを開くのを躊躇してしまうほどでした。

そこで論文の構成方法が悪いことに気づき、これまで勉強会で諸先輩方から頂いた資料を読み返し、まずは論文構成を見直しました。水産土木の試験では、以下のように問われます。

- 1) …について検討すべき項目を多様な視点から述べよ。
- 2) 1) について、最も解決すべき課題を1つ上げ、現在の技術水準と解決策を示せ。
- 3) 2) について、その解決策による効果と新たに生じるリスクを述べよ。

おそらくこの問いは多くの試験区分で採用されているのではないのでしょうか。ご覧の通り、上記1)～3)まで全ての問いがつながっています。そのため、書き始める前に論文の全体像を構成する必要があります。これについてはこれまでの受験でも対応できていたと思います。しかし、自分ができていなかったのは「起承転結の論理を幾重にも展開させながら論文を構成していくべし。」ということです。分かりにくいですが、論文全体が起承転結の構成をなしているほか、「パラグラフ単位でも起承転結を構成し

\*水産庁 漁港漁場整備部 整備課 課長補佐（企画班担当）

ている必要がある」ということです。確かにこの方が読み手にとって読みやすく、テンポよく論理展開できるので、技術士試験が問う「専門知識、応用能力、問題解決能力及び課題遂行能力」に応えるために必要な文章技術であると感じ、これを実践して3回目の受験で合格しました。

### 前回の反省もなく総監試験へ

そして勢いそのままに令和2年度の総合技術監理部門の試験にチャレンジしました。「午前の5択の勉強と論文ではトレードオフを述べていけばよい」、との周囲のアドバイスをそのままに受験しましたが、結果は不合格でした。総監の本質を理解せぬまま受験し、「問われていることにきちんと答える」という水産部門受験で学んだはずの基本を踏襲せぬまま同じ失敗を繰り返してしまいました。

### 総監2回目のチャレンジ

令和3年度はまたまたお休みして、令和4年度に総監を再受験しました。これも同様に職場での勉強会で厳しく添削していただきました。上述の総監の本質を理解していない（単なるトレードオフを論ずるだけでは足りない）、という指摘を幾度となく受けました。総監の本質とは、文部科学省の総監キーワード集の序文に記載されている通り、科学技術とは人々の暮らしを良くするためのものであって、要素技術の最適化など一部分のみの改善だけでは、最悪の場合、社会に対して悪影響を及ぼす事態に発展しかねないということ、そして技術的課題を5つの管理を駆使して、恒常的な解決策を提案するというのが総合技術監理の基本的考え方と理解しました。このことを念頭において論文執筆を心掛けました。そして、どうにかこうにか合格を勝ち取ることができました。

### 技術士チャレンジを振り返って

今回執筆依頼をいただき、改めて自らのチャレンジを振り返りましたが、ずいぶん遠回りしたな、というのが率直な感想です。これまでの行政経験では計画や予算に関するものが多く、純然たる技術的素養を持っているという自覚がなかったのですが、今回の技術士取得を通じて、技術的思考のための「頭の使い方」を学ぶことができたことが良かったと思います。

それを実感したのが令和2年度に漁港漁場漁村総合研究所に向向した際でした。多くの技術者がいる中で個々のプロジェクトの進め方を議論するのですが、その議論についていくために技術士試験を通じて培った技術的思考が役に立ったと感じました。

次に役に立ったことが総監の勉強経験です。今は土木技官の人事を担当しているのですが、組織マネジメントをする上で重要なことの一つとして「心理的安全性」を如何に職員の方々に感じていただくかということです。既にGoogle社が取り入れて注目されているようで、私もこのことに配慮しながら仕事をしているつもりですが、何分役所に入って人事の仕事をするのが初めてでしたので、今でも右往左往しますが、総監の勉強で学んだ人的資源管理での要素技術が活きていると感じています。当方でも多くの技術者が在籍しており、その個々人の「心理的安全性」を確保するためには、それぞれの人が置かれた背景要因を把握する必要があり、それに対する対処法も多種多様なのですが、その「対処の手段そのもの」を考える上で総監で学んだ要素技術が活きていると感じています。

当初技術士の勉強を始めた時には技術士の知見が実際の業務にこのように活かすことができると思いませんでしたが、振り返ると業務経験上求められる事案に対する対応策を試験を通じて学ぶことができたのではないかと考える次第です。

#### 【著者紹介】 中西 豪（なかにし ほう）

昭和52年生まれ。平成14年大阪大学大学院工学研究科土木工学専攻修了。水産庁計画課、企画課、防災漁村課、外務省在ペルー大使館二等書記官、国土交通省中部地方整備局、同省国土政策局離島振興課、(一財)漁港漁場漁村総合研究所勤務等を経て現職。